

日付:2014年10月26日／聖書:イザヤ書40:1～11

主題:「神の言葉はとこしえに立つ」

イザヤ書 40 章は、ユダ国がバビロニア帝国に敗れ、民の多くが強制連行され、バビロン捕囚の民となったことが記されている。もうすでに 50 年が経とうとしていた。その置かれた現状には、当たり前のように不条理な差別があり、人間扱いされない実情がそこにはあった。預言者イザヤは、その現状に向き合い神の慰めと希望を語るのである。《慰めよ、わたしの民を慰めよと／あなたたちの神は言われる》と。

《呼びかけよ、と声は言う。…肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。》 「肉なる者は皆、草に等しい…この民は」とは、ユダの民、イスラエルの民のことを言っている。おごり高ぶる国は、結局は、草や花のように枯れてしまうものに過ぎない。そしてこの異国の地バビロンもまたいずれ滅び行くものだ…と預言している。ゆえに、その現状に嘆くなという励ましの言葉である。そしてあなた方は、今も後もとこしえに変わることのない神の言葉にすがっているか、信頼を置いているか、耳を傾けているか…と問いかけている。《神の言葉はとこしえに立つ》ということをおなた方は現実の事として捉えなければならないというメッセージがここにある。

実はこれはキリスト者のもう一つの現実ということである。この世の現実に向き合うことを聖書は記し、国がどこへ向かおうとしているのか、時の王の罪を指摘すること、民の置かれた不条理の現状、人権に対する差別への非難、聖書はそういう罪を指摘している。それはキリスト者は、この世の現実に向き合いなさいというメッセージである。そして、もう一つの現実は、「神の言葉はとこしえに立つ」ということである。

神の言葉に向き合うということは、この世において、あの世の業、天の業、神の業が、この世でも顕されるということである。私たちは、この世において、神の言葉に立つことができるか。それがキリスト者、教会に問われている。この世の現実とあの世の現実は、別々の事としない。(神谷)